

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors

タイトル：「アフリカに関する史的研究と資料」（平成 28 年度第 1 回研究会）

日時：平成 28 年 7 月 23 日（土）午後 1 時 00 分より 7 時 00 分

場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 306

大澤広晃（AA 研共同研究員／南山大学）

「アフリカ・イメージの変化？：イギリス「人道主義」に関する史料を手がかりに」

本報告では、イギリスの「人道主義」に関連する文書史料を取り上げ、そのなかに現れたアフリカについてのイメージ／表象を抽出し、それが 19 世紀末から 20 世紀初頭にかけてどのように変化したのか、あるいは、変化しなかったのかを論じた。

報告では、具体的に 2 つの史料を紹介した。史料 1 は 1880 年に作成されたもので、当時のイギリスにおける代表的な「人道主義」団体であった **Aborigines Protection Society (APS)** が植民地大臣に宛てて提出した意見書である。ここでは、主に南アフリカのナタール植民地を事例に、そこでのアフリカ人の結婚制度や婚資の慣習が「野蛮」なものとして描かれ、その改革の必要性が説かれている。報告では、このような言説を構成していた要素として、ヴィクトリア時代イギリスの社会・文化規範を「文明」と定義しそれとの対比でアフリカ人の社会制度や文化を「野蛮」とみなす思考様式や、「野蛮な社会で隷属状態にあるアフリカ人女性」を「救済」することを白人女性の責務とみなす帝国フェミニズムの存在などを指摘した。他方、史料 2 は 1903 年のもので、南アフリカにおけるアフリカ人の結婚制度や婚資について当時の **APS** 書記が新聞記者に語ったインタビュー記事である。ここでは、アフリカ人の結婚制度や婚資が肯定的に語られており、史料 1 にみられるアフリカについての表象とは明らかな対照をなしている。このような変化が生じた背景として、報告者は、世紀転換期に非白人の文化に固有の価値を認めてその保護を主張する新しい「人道主義」の言説が出現したことや、自由放任と資本家による統制なき利益の追求を批判した新自由主義 (**New Liberalism**) の思想が影響を与えた可能性などに触れた。結論として、19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて、「人道主義」の内部でアフリカについてのイメージは変化したといえるが、他方で、「人道主義者」がアフリカについてのイメージを一方的に構築しこれをアフリカに押しつけようとしていた点では連続性があったと述べた。

報告後の質疑応答では、「新しい人道主義」の意味、アフリカの他地域との比較、**APS** の具体的構成や情報の入手先、同時代の植民地統治思想との関連、西洋文明を受容したアフリカ人への姿勢、イギリス国内での「文明」へのまなざしの変化、研究史のなかでの位置付けなどについて、質問・コメント・批判をいただいた。いずれも報告では十分に触れら

れなかった点であり、大変有益であった。また、成果出版での執筆内容についてのアドバイスもいただき、今後の課題がより明確になった。さらに、議論の過程で、報告者が研究会全体の目的や問題意識を十分に共有できていなかったことも分かってきた。今回の報告では、主にイギリス史の観点からイメージ／表象としてのアフリカについて論じた。しかし、本研究会の趣旨に照らせば、そうした表象と実態のズレこそが問題なのであり、報告でもその点を主題とするべきであった。研究成果の公表に向けて、自らの問題意識を改め、さらなる研鑽に励んでいきたいと考えている。

永原陽子（AA 研共同研究員／京都大学）

「アフリカ史/アフリカ地域研究のアフリカ化と植民地史料」

報告では、最近の南アフリカでの知の脱植民地化をめぐる議論を歴史学に引きつけて紹介しつつ、その中から本共同研究が今後成果をとりまとめるにあたり共有すべきアフリカ史理解およびそのための史料の問題にかんする論点を提示した。さらに、アフリカ史のアフリカ化において検討すべき植民地史料の利用可能性について、第一次世界大戦期の南部アフリカを例として考察した。

南アフリカでは 2015 年 3 月、ケープタウン大学を舞台に”Rhodes Must Fall”(RMF) と称する学生運動が起こった。直接にはキャンパスのセシル・ローズ像の撤去を求めるこの運動が俎上に載せたのは、民主化後 20 年以上を経ても変わらない大学の植民地主義的な知のあり方である。抗議運動は瞬く間に南アフリカ各地に広がり、イギリスやアメリカにも飛び火した。RMF 運動そのものは現在までにほぼ収束した観があるが、運動をめぐる発言した多くの論者の意見や、運動と前後して生まれてきた様々な集団の新たな歴史意識の中に、アフリカ史やアフリカ地域研究のあり方をめぐる重要な論点を見出すことができる。

RMF 運動の背景として、1998/99 年にケープタウン大学のアフリカ研究センターで、現在のアフリカ地域研究を世界的にリードする Mahmood Mamdani が提起アフリカ地域研究・教育の改革が大学当局によって潰された出来事がある。Mamdani の提案は、歴史理解の根本的な組み換えをアフリカ地域研究・教育の改革の中心に置いている点で、アフリカ史研究のあり方についての重要な問題提起ともなっている。その主張の核心は、植民地時代を中心に据えて pre-colonial, colonial, post-colonial の三つの時代にアフリカ史を区分する歴史認識への批判である。そのような歴史認識を根本的に変革する方法として提起されたのは、①アフリカの歴史をアフリカ人自身の史料によって示すこと、②アフリカ史をジェンダー視点から明らかになるような *longue durée* おいてとらえること、③経済史・文明史的な観点から、大西洋奴隷貿易以降に分断され固定されたアフリカ概念を再考し、トランス・サハラ交易やインド洋交易などの歴史の中で流動的で複数的なアフリカ概念を構築すること、④政治史的な観点から、植民地主義の作り出した「国家」の枠組を批判し、

アフリカにおける「国家」の意味を再構築すること、それによってアフリカ史における南アフリカ例外論を克服すること、などである。

Mamdani の議論や、その前提となっているアフリカ史・アフリカ地域研究の蓄積、さらにアパルトヘイト体制崩壊から RMF 運動に至る時期の南アフリカ内外の様々な論者（たとえば、Issa Shivji, Achille Mbembe, Ashwin Desai など）の議論の検討から、アフリカ史・アフリカ地域研究の「アフリカ化」の論点として、①三時代区分の相対化、②外に開かれると同時に、パン・アフリカニズム的であるアフリカ概念、すなわちナショナル・ヒストリーの相対化、という時間と空間のとらえ方が浮かび上がる。そのような方向性をもってアフリカ史をアフリカ化する際に、アフリカ人自身の手による史料がもつ重要性は明らかであり、その点で、これまで以上にアラビア語・アラビア文字史料が発掘・活用されなくてはならない。従来の研究の中心であった西アフリカのみでなく、アパルトヘイト以降の南アフリカにおける人々の歴史意識の変化に対応して再発見されつつあるアラビア文字表記のマレー語・アフリカーンス語史料の活用に見られるように、アラビア語・アラビア文字史料は、アフリカ史研究にとって未だ十分に活用されているとは言い難い。

しかしその一方で、アラビア語・アラビア文字を採用しなかった地域・集団が南部アフリカを中心に大陸の中に多く存在することもまた事実であり、それらの地域の歴史を再構成するにあたっては、Mamdani が指摘する通り、考古学資料やオーラル・ヒストリーのみにも頼る方法には大きな限界があり、植民地史料、また広く外来者の観察史料がもつ重要性は依然として大きい。そこから、植民地史料をアフリカ史のアフリカ化という観点から再読する方法が課題となる。

報告者自身による植民地史料の再読の例として、ここでは、第一次世界大戦期の南部アフリカ史を取り上げ、①異なる「帝国」の史料を突き合わせることで、②植民地史料と民衆の伝承やアートなどを組み合わせること、③環境史的な知見を取り入れて植民地史料を再読すること、④植民地史料内のアフリカ人の証言史料（裁判史料を含む）を精読すること、⑤写真資料を用いて、社会変容をジェンダー史観点から分析すること、などの可能性について論じた。

以上の報告をめぐり、討論においては、南アフリカで再発見されているアラビア文字史料の性格や内容、三時代区分を克服した歴史把握の具体的な方法、「開かれたアフリカ史」のための理論的な枠組み（「アフラシア」の観点）などをめぐって活発な議論が行われた。